

瀬戸内の島ならではのヴィンテージなジャムづくり (株式会社瀬戸内ジャムズガーデン)

<法人の概要>

所在地：山口県周防大島町

設 立：平成 23 年

資本金：500 万円

売上高：1 億 800 万円（平成 28 年）

（うち農業：0 万円、うち農業関連事業：1 億 800 万円）

役 員：2 名（うち農作業従事 2 名）

従業員数：30 名、うち農業従事者 3 名

経営面積：120a 営農作物：柑橘類、イチゴ、ブルーベリー等

農業開始時期：平成 19 年



店舗・工房・カフェ外観



松嶋社長とジャム販売店舗

<農業参入に至った経緯・動機>

新婚旅行で訪れたパリのコンフィチュール（フランス語でジャムの意）専門店で多彩なジャムに魅了され、ジャム専門店を開業することを決意した。

まず、奥様が平成 15 年にジャムの加工・卸販売から開始し、平成 16 年に奥様の故郷である周防大島で夏季限定の直営店をオープンした。平成 19 年には松嶋社長が電力会社を退職し周防大島へ I ターンして通年営業を開始するとともに、ブルーベリーなど島内で確保できない果実を自ら生産するため農業部門を設立し、平成 23 年に株式会社化した。

<農業参入することを決めてから営農開始まで>

ジャムやマーマレードの原材料は基本的に島内の契約農家から仕入れることとしたが、確保できない果実については島内の耕作放棄地を借り受け自ら生産することとした。また、栽培技術は県農業試験場や地元農家のアドバイスを受け習得した。

<営農開始から現在まで>

自社生産する果実類も季節感を出したジャムに加工するため、柑橘類や杏など品目を増やし、無農薬もしくは減農薬で栽培しており、町役場の斡旋により農地中間管理機構も活用するなど経営面積も 1.2ha まで拡大している。また、周防大島町は高齢化率が全国でも高く離農する農家が相次いでいた状況から、島内農家に利益が還元されるよう、市場価格を大きく上回る価格での原材料の買い取りを行った。現在では契約農家が 50 件を超え、年間 180 種類以上のジャムやマーマレードを製造するに至る。

従業員は島外からの移住者を含め 30 名を雇用しており、果樹経営を目指す若者の自立までの間、ジャム工房等で働く場を提供するほか、自立した就農者から市場価格よりも高い価格で原材料を買い取るなど、U・I ターン移住者への支援を実施している。

また、従業員の安定雇用のため、農業部門の繁閑によって生産・加工部門のシフト調整を行うほか、平成 25 年には六次産業化・地産地消法に基づく総合化事業計画の認定を受け、平成 26 年には 6 次産業化ネットワーク活動交付金を活用して新工房を整備するとともに、雨天時の業務量確保と島内での原材料確保のため、産官学共同連携によるイチゴ栽培技術実証実験に参加し、最新技術を導入したイチゴハウスを整備し、生産体制の強化を図っている。



カフェからの景観



産官学連携の共同事業で整備したイチゴハウス内

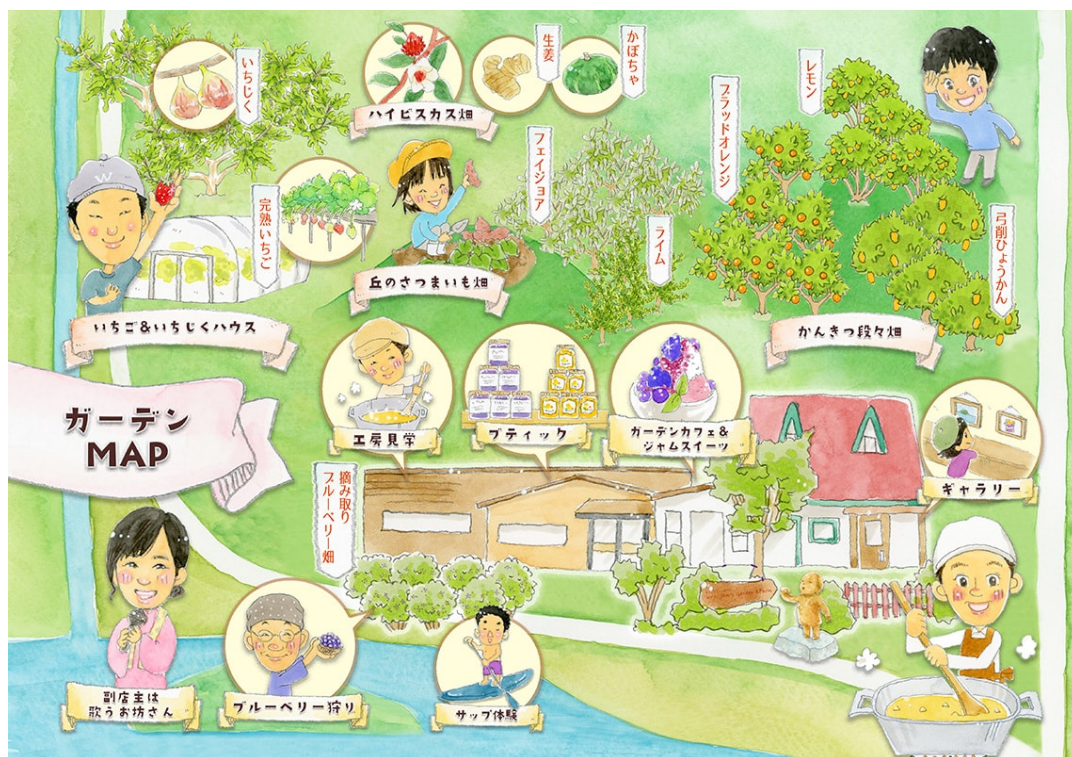


旬の素材の個性を活かしたジャムは年間 180 種類以上

平成 24 年に移住者を支援する組織「島くらす」を民間主導で設立し、ジャムズ・ガーデンでも収穫体験イベントを開催するなど新規就農者と地元農家とのつながりを深める場を提供するほか、松嶋社長は町の観光協会の副会長に就任するなど、島の活性化に向けた取組にも積極的に関与している。

「農家に再生産を保障し利益も生むような経済的循環が生まれれば、次代を担う農家も生まれ育つはず」との考えから、自社の農業部では地元で生産されている果実は生産しないなど、地元農家の競合相手になるのではなく、できる限り補完しあう関係の農業を構築していくことで、地元農家に経済的循環を生むとともに高品質のジャム用果実を確保していく。

農地の確保や生産技術の習得を始め、営農の継続性を図るには地域との調和が重要なため、生産品目など地元農家と競合するのではなく、補完・共存できることが理想的と考える。



周防大島の観光拠点にもなっている「人とのつながりを作る場」ジャムズ・ガーデン

